

「2024年中国・浙江大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学農学部2年 奥田 和寿

① 学習成果

想像の中であった中国の地を、自らの感覚器官を通して体験できた価値は計り知れない。今回は短期の語学留学ということもあり、学習に資した面はどちらかといえば語学そのものよりも文化理解である。しかし、そうした文化理解は、中国語を話せる同行者がいたからこそ可能になったものである。語学ができなければ何もできない、という環境に身を置いたことで、否応なく語学の必要性を痛感させられた。なお、多少中国語の発音が完璧でなくとも、日常会話ではほとんど通用することが分かった。中国ではそもそも言語環境が多様であるため、普通話の発音には地域差が存在し、我々は“別の省から来た者”として認識されうる。一程度の語学力が担保されていれば、国内で完璧な語学力の習得に固執するよりも、むしろ積極的に留学すべきではないかと思われた。

② 海外での経験

中国本土のネット規制により、満足に日本のネットワーク環境に接続できない場面が多かった。今回の渡航は複数人かつ短期間であったため、他の参加者に助力をいただくことが出来た。

ネット環境は言わずもがな、共産党当局が人民に対して徹底的な監視および統制を布こうとする意志を強く感じた。街中には数十メートル間隔で監視カメラが必ず設置されており、交差点や共産党諸施設(人民解放軍の拠点など)には特に多く見受けられた。また、公共交通機関の利用に際して厳重な検査体制が実施されていた。地下鉄においてさえ日本の空港レベルの持ち物検査が行われており、初めて利用したときは乗車するまで想定外に時間がかかってしまった。新幹線(高鉄)も同様であり、いわゆる“自由席飛び乗り”を試みることはほとんど不可能である。

③ プログラム内容

長期で留学している語学クラスの前半2週間分に飛び入り参加する形式である。文法、会話、聴解の3つの授業で構成されていた。私は初心者クラスであったため、授業間の内容には大差なく、もっぱらピンインに従って正しく発音するという内容であった。語学授業に加えて、現地のTAの方が、大学周辺の観光地・博物館に連れてもらうアクティビティもあった。浙江大学博物館や河坊街、中国刀剣博物館などを訪問した。

④ 進路への影響について

私は農学部に所属しているため、中国文学や中国哲学といった、今回のプログラム内容と直接的な関りを持つ進路を選択する可能性は低い。しかし、日本の大学院では中国出身の院生と関わる機会が多く、そうした方々と交流するうえで、今回の経験が足掛かりになるという点では有用であろう。また、同じく未知数であるものの、中国の大学院へ留学・訪問研究する機会の可能性も否定できない。共産党政府は学術に圧倒的な研究費を投入しており、浙江大学の諸設備を見ただけでも、その資金力がうかがえた。憶測にすぎないが、10年から20年後には京都大学の学術レベルを凌駕しているだろうと感ぜられ、我が国の研究機関のみに留まる選択は排除されうるに違いない。